頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム
—世界の成長と共存を目指す革新的生存基盤研究のための日本・アセアン協働強化—
報告書

非古典論理の観点からの分析アジア哲学の展開

派 遣 者：大西　琢朗
派遣期間：2015 年 10 月 1 日～3 月 31 日
派 遣 先：シンガポール国立大学（シンガポール）

キーワード：分析アジア哲学，非古典論理，インド論理学，テトラレンマ

1．研究課題について　(400 字程度)

「分析アジア哲学の構築」にかんする国際共同研究への寄与をなすのが本派遣の目標である。分析アジア哲学とは，現代の分析哲学の視点や非古典論理の道具立てによって，仏教や儒教などのアジア思想を捉え直そうという新しいトレンドである。派遣者は，アジア思想の文献読解作業とそれを分析する現代的・理論的ツールの開発・習得に従事する。具体的には，インド哲学・論理学の根本的な論理原理のひとつである「テトラレンマ (四句否定)」にかんして，とくにそこに現れる矛盾および否定の概念を適切に解釈するための形式論理的ツールの開発を目指す。

2．派遣の内容　(400 字程度)

2015 年 10 月 1 日から 2016 年 3 月 31 日まで, シンガポール国立大学(NUS)に客員研究員として滞在した(帰国することなく引き続き 9 月 27 日まで滞在予定である)。本来の受入先であった Jay Garfield 先生が別の大学に移ってしまったため，Michael Pelczar 先生にホストになっていただき，研究を行なった。派遣期間の前半にあたる今期は主に，上記研究課題「分析アジア哲学の構築」のための「現代的・理論的なツール」としての応用を見据えつつ，これまで自身で行なってきた形式論理にかんする研究を継続する，という形になった。平行して，ジャイナ教や仏教思想における独特の論理学についての文献調査も進めた。NUS の哲学科に部屋を用意していただき，そこで文献調査や論文執筆に従事した。また，哲学科で開催されるセミナーや私的な読書会にも参加した。

ヘイズで霞むビル群

3．派遣中の印象に残った経験や体験　（800 字程度）

到着直後は，インドネシアの森林火災によるヘイズ(煙霧・煙害)の規模がちょうどピークに達する時期であった。少し目や喉に違和感を覚える程度で明確な健康被害はなかったが，リアルタイムで更新される汚染状況の数値をつねにチェックする生活がしばらく続いた。ニュース・新聞などからは，東南アジア諸国の政治的関係や産業構造に由来する複合的な問題であることが見てとれた。

大学内での生活でもっとも印象的なのは，教員同士のコミュニケーションが非常に密である(少なくともそのように見える)という点である。昼の 12 時になると誰かが各教員の部屋のドアをノックして回り，連れ立って学内の食堂でランチをとり，場合によってはその後さらに 2 時頃まで，コーヒーを飲みながら話しつづける。こうした日常的なコミュニケーションの場があったため，派遣者もすぐに馴染むことができた。また，学期中はほぼ毎週，海外(欧米豪が中心)から研究者を迎えてセミナーが行われる。時間をかけたランチ・コーヒーのあと，リラックスした雰囲気で講演に移る。講演の具体的な内容よりも重要なのはおそらく，互いの研究状況・環境についての情報交換であろう。こうしたカジュアルな仕方での，人と情報の循環ルートが確立されているのは，当地の大きな強みであると思われる。

4．目的の達成度や反省点　（400 字程度）

研究に専念できる環境を与えていただいたため，論文の執筆や新しい分野にかんする勉強にじっくりと取り組むことができた。11 月 5 日にセミナーで同僚向けに発表を行ない，そこでの議論を踏まえて論文を一本完成させ，雑誌に投稿した。現在審査中である。ただしここまでの研究内容は，いわゆる西洋的な論理学ないし論理学の哲学の範疇のものであり，研究課題である分析アジア哲学にかんするアウトプットを生み出すまでには至っていない。

人的交流の面では，上述のランチやセミナーなどの日々の生活を通じて，NUS の教員をはじめとする多くの人とのつながりを形成することができた。こちらの英語力の不足もあり，複雑な議論のなかにはまだ入っていけないことが多いが，専門的な研究の内容だけでなく，大学を含む高等教育の状況，政治や先端の科学技術などのさまざまな話題について，日本・アジア・欧米などそれぞれの視点からフランクに話し合うという貴重な経験を積むことができた。

セミナーのポスター

キャンパスでのスコール

5．今後の派遣における課題と目標（400 字程度）

引き続き半年間，NUS に滞在し研究を続ける。派遣の後半となる来期は，これまでの研究成果を踏まえ，分析アジア哲学にかんする論文を完成させたい。具体的には，仏教・ジャイナ教の論理学に見られる独特の意味論的カテゴリー(真理値)の考え方について，形式論理の観点からの分析を行なう。先行研究では，比較的シンプルな多値論理が用いられているが，もう少し複雑な道具立てを用いてよりきめ細かい分析ができないかと考えている。

また，NUS だけでなく他大学にも人脈を作りたい。隣接する Yale-NUS 大学や，南洋理工大学にも活発な哲学科があり，NUS ほど頻繁ではないがセミナーが開催されているので積極的に参加し，可能であれば発表も行なわせてもらおうと考えている。さらに余裕があれば，周辺の諸国の大学にもでかけて発表を行ない，人的なつながりを増やしたい。